

図書ニュース

第5号

2016.12.5 発行

今年も残り一ヶ月をきりました。新たな気持ちで2017年を迎えられるように今年の内
にできることはやり残しのないように生徒諸君には一日一日を大切にしてほしいと思
っています。

さて、今回が初の図書ニュースの執筆となったわけですが、私は読書といえば専ら小
説でした。特に中学生のころから東野圭吾さんの作品に惚れ込み、よく図書館に借りに
行ったものです。そこで今回はその東野圭吾さんの作品の中から、特に印象に残ってい
るものを中心に紹介できたらなと思っております。

東野圭吾：1958年2月4日に大阪市生野区で生まれ、大阪府立大学工学部電気工学科
卒業後、1981年に日本電装株式会社に技術者として入社。務めながら推理小説を書き、1985
年に「放課後」が第31回江戸川乱歩賞を受賞。その後、1986年に同社を退職し小説家にな
る。作品は主にミステリー小説が多いが、パロディやエンターテイメントなど多彩です。
技術者出身だけあり、科学を扱った作品が多く、人気のガリレオシリーズはそれを代表す
る作品になります。また、スポーツを絡めた作品も多く、ご自身が学生時代に携わってい
た剣道や野球、アーチェリー、スキー等を題材にした作品も多く見られます。

①『手紙』(913/H50//4)

この作品は私が東野圭吾さんの作品を好きになるきっかけとなったものです。当時、
中学生だった私は学校で行われている朝の読書の時間に読む本を探していました。ちょ
うどそのころ映画化されていたこともあって、なにげなく手に取ったのがこの本でした。
それまではあまり本を読まなかった私ですが、この作品にはまって毎日、“朝読”の時
間が待ち遠しかったのを良く覚えています。

内容は強盗殺人の罪で刑務所に服役している兄から毎月弟に届く“手紙”が物語の主
軸となっています。最高の兄弟愛がそこには描かれており、最後に別の“手紙”の存在
が明らかになった場面は、涙なしには読むことができない作品となっています。映画と
共にこの小説は読んでいただきたいです。

②『放課後』(913//H50//33)

紹介文の中にもあったように江戸川乱歩賞を受賞したこの作品はまさに“THE 推理小説”といった感じです。主人公の前島は高校教師でアーチェリー一部顧問。いつの日からか何者かに命を狙われている出来事が頻繁に起こっていたが、ついに同僚が殺害された。自分の命を狙われていることと関係があるのだと思い、犯人探しに乗り出した矢先、第二の事件が起こる。ラストに明らかになる事件の動機がとても衝撃的なものになっています。思春期真っただ中の皆さんには共感できる部分もたくさんあるのではないのでしょうか。

③『秘密』(913//H50//3)

自分が同じ立場になったらどの様な行動をとってしまうのか？考えさせられてしまう作品です。物語は、妻と娘がバスの転落事故に遭遇。妻は亡くなり、娘は母親に守られて外傷なく助かるが、魂が母親のものになってしまう。妻の魂を宿した娘と父親の“秘密”の生活が始まります。物語が進むにつれて父親の苦悩や葛藤が伝わり、心にぐっとくる作品となっています。ラストには何とも言えない切ない“秘密”があきらかに……。本当に何回読んでも泣かせる作品です。

④『容疑者 X の献身』(913//H50//1)

人気ガリレオシリーズ初の映画化作品。私はこの作品を映画で知り、小説を読みました。とても有名な作品なので読んだことのある北野生も多いのではないのでしょうか。見どころは何といっても主人公の湯川と石神の親友二人が繰り広げる心理戦と最後に分かるトリックの衝撃の凄さ。ストーリーも素晴らしく、さすが直木賞作品です。映画と共にこの小説は是非読んでいただきたいです。

⑤『疾風ロンド』(913//H50//29)

今回紹介する作品の中では比較的新しいものがこの作品です。つい先日映画化されたものが公開になりました。「強力な生物兵器を雪山に埋めた。雪が解け、気温が上昇すれば散乱する仕組みだ。場所を知りたければ3億円を支払え」—そう脅迫してきた犯人が事故死してしまった。上司から生物兵器の回収を命じられた研究員は、息子と共に、とあるスキー場に向かった。頼みの綱は目印のテディベア。だが予想外の出来事が、次々と彼等を襲う。スリルと臨場感の伝わる一作です。